

## 『クードルーン』に見られる不定関係代名詞構文

長 縄 寛

### 0. はじめに

中高ドイツ語（以下Mhd.）の関係代名詞は、主として現在のドイツ語と同じように、先行詞となる上位文中の名詞（句）に対する付加語の機能を果たす関係文を導入する定関係代名詞 *der*, *diu*, *daz* と、先行詞を自らに含み、上位文に対する主語や目的語となる名詞節を導入する不定、一般化の関係代名詞 *swer*, *swaz* 「～であるところの人は皆」「～であるところの物はすべて」に大別されるが、本稿では特に後者の不定、一般化の関係代名詞を扱うことにしたい。

Mhd. の *swer*, *swaz* は古高ドイツ語（以下Ahd.）の *sô* (h)*wer* *sô*, *sô* (h)*waz* *sô* という三語の結びつきからなる表現形式に由来する。(h)*wer*, (h)*waz* がそれぞれ人と事物を表わす不定代名詞であって、本来二つ目の *sô* は従属文の導入詞として一つ目の *sô* と相関的に用いられ、「～のような、そのような人（物）」の意であった。そしてMhd. 期に二つ目の *sô* が欠落し、一つ目の *sô* が後接的（*proklitisch*）に結合した結果、*swer*, *swaz* と一語になった。従ってこれらは元来、先行詞となる名詞要素を内包していたと言うことができ、先行詞を説明する付加語的な定関係代名詞構文とは厳密に区別されるべきである。

*swer*, *swaz* によって導入された関係文は、通常主文中に置かれた男性および中性の指示代名詞によって前方照応的（*anaphorisch*）に受け直される、あるいは後方照応的（*kataphorisch*）に先取りされるが、Mhd. ではそれぞれ男性および中性の人称代名詞が指示要素として用いられることもあり、また稀に主文中の代名詞が複数形で現れる場合も見られる。さらには、関係文全体が主文に対する名詞節としてではなく副詞節として機能し、*swer* が条件文の導入詞として „*wenn einer*“ 「もし誰かが～すれば」あるいは認容文の導入詞として „*wer auch immer*“ 「たとえ誰が～

しようとも」の意味で、swazもごく稀に„wenn etwas“「もし何かが～であれば」の意味を持つこともあるが<sup>1</sup>、ふつうは„was auch immer“「たとえ何かが～であれ」の意味で用いられる。この他swazは副詞的な4格として、„soviel“「～の限り」、„wie sehr auch“「どれほど～しよう」との意味でも用いられ、Mhd.のswer, swazには今日のwer, wasと比べると実に様々な用法が混在していたのである。

前稿では、ハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue) による宮廷叙事詩『イーヴァイン』(Iwein)に見られる不定関係代名詞構文を扱ったので、本稿ではその追跡調査という位置づけで特に英雄叙事詩『クードルーン』(Kudrun)を中心に、そこに見られる様々な不定関係代名詞構文に焦点を当て、どのような構文上の特徴があるのか、また『イーヴァイン』との相違点、類似点が見られるのかどうか検討したい。なお、『クードルーン』のテキストはK. バールチュ (Karl Bartsch) の版を受け継ぎ、K. シュタックマン (Karl Stackmann) によって出された改訂版を使用した。P. ピーパー (Paul Piper) の版も適宜参照し、テキストや解釈上の相違についても触れることにしたい。また、必要に応じて『イーヴァイン』やその他の作品からの引用も行う。

## 1. 名詞的機能の関係文

### 1.1. 関係文の前置

名詞的機能の関係文は『クードルーン』に126例見られ、そのうちswer文の前置が28例、swaz文のそれは54例、後置はそれぞれ6例、38例である。はじめにswer文が前置された例から見ていくことにしよう。

swer文が前置された場合最も一般的であるのは、既に述べた通り後続の主文中にswer文を受け直す指示代名詞が置かれるケースであるが、人称代名詞で受け直す場合も見られる。前者は『クードルーン』に20

1 Vgl. Kan Naganawa, *Zu den verallgemeinernden Relativpronomen bei Otfrid und im Iwein*. In: Sprachwissenschaft, Bd. 29, Heft 3, 2004, S. 321-344.

例<sup>2</sup>、後者が7例<sup>3</sup>、その他swer文を所有代名詞で受け直す非常にまれなケースも1例のみ見られる。次に1例ずつ挙げよう。

- (1) swes got wil vergezzen, wie sol sich der behüeten? (1138, 3)  
神に見放される者はどうやって自分の身を守ったら良いのか。
- (2) Wate sprach mit zorne: „swer dir daz hât geseit,  
ob ich hiute sturbe, daz wære im niht ze leit. (242, 1f.)  
ヴァテは怒って言った。「あなたにそのようなことを言った者は、  
たとえ私が今日死のうとも、決して悲しみはしますまい。」
- (3) Si gerten urloubes. dô sprach daz edele wîp:  
„swer an mich gedenket, sælic sî sîn lîp. (944, 1f.)  
彼らはいとま乞いをした。その時、高貴な婦人が言った。  
「私のことを案じてくださる方の身に祝福あれ。」

例(1)のswesはvergezzenの2格目的語であり、ここではswes文が後続の指示代名詞derで受け直されている。これに対して例(2)では、swer文で表わされる人が二行目後行に置かれた人称代名詞3格のimによって受けられる。一行目最後のgeseitはsagenの過去分詞gesagetの縮約形で、次行のleitと押韻させるために用いられた語形であると考えられる。また二行目前半のobは認容文の導入詞として用いられ、認容文全体の内容が後半のdazで受けられる。例(3)は二行目前半のswer文を所有代名詞sînで受け直す極めてまれなケースであり、『クードルーン』ではこの一箇所のみである。二行目のsîn lîpは文字通りには「その方の身」であるが、とくに「体」の意味なしにwîpと押韻させるためにerの言い換えとして用いられることが中高ドイツ語の文学ではきわめて多い。

swer文を受け直す代名詞は通常例(1)から(3)のように単数であるが、時に複数の代名詞が用いられることもある。Mhd.の辞書(BMZ)には『イーヴァイン』の1例と並んで『パルツィヴァール』からの用例もかなり挙

---

2 例(1)と(4)の他に287, 4. 141, 2. 412, 4. 615, 2. 640, 2. 700, 4. 764, 2. 872, 4. 932, 3. 943, 3. 1130, 2. 1130, 3. 1349, 1. 1350, 2. 1383, 4. 1387, 3. 1411, 4. 1437, 2.

3 例(2)と(5)の他に358, 4. 377, 3. 691, 2. 1105, 1 (pl.). 1681, 2.

げられているが<sup>4</sup>、『クードルーン』にも指示代名詞が1例、人称代名詞が2例見られる。以下に1例ずつ示そう。

- (4) swer ez mit willen tuot,  
und mir ez mit den vînden hiute hilfet tîchen,  
 swaz der alten stirbet, den wil ich die weisen alle rîchen.“  
 (1389, 2b-4.)

今日、みずから進んで敵との  
 戦で私を助けてくれる者には、どれほど多く老いた者が  
 死のうとも、彼らの孤児を私がみな面倒を見るつもりだ。

- (5) swer aber âne koufen ir gâbe ihtes gerte,  
 si wâren in dem willen, daz man ir manigen gûetlîche werte.  
 (325, 3f.)

これに対して、買わないで彼らの商品の何がしかでも求めた  
 者たちの多くの者に、彼らは気前よく与えるつもりであった。

例(4)では一行目後行の *ez* が二行目全体の内容を指し、二行目前行の *ez* は動詞 *tîchen* の不定の目的語であり、*ez tîchen* で „*tätig sein*“ の意である<sup>5</sup>。三行目後行の *den* は P. ピーパーによれば<sup>6</sup>、一行目から二行目の *swer* 文で表わされた人を受ける複数 3 格の指示代名詞である。三行目前半の *swaz* の文は部分の複数 2 格の *der alten* とともに認容文で “*soviele der Väter auch den Tod finden*“ の意味である<sup>7</sup>。ここは *swer* の文が三行目に挿入された認容文中の *der alten* によって言い換えられたために、それに続く主文でも *swer* 文を受ける指示代名詞が本来の単数でなく、複数 3 格の *den* になっていると考えられる。

例(5)では一行目の *swer* 文が、二行目前半の主文を挟んで、これに従属する *daz* 文中に置かれた複数 2 格の人称代名詞 *ir* によって受けられる。

4 Vgl. BMZ, III, S. 569a, 11ff.

5 Vgl. Grimm, Grammatik 4, 335; Paul/Mitzka, § 220.

6 Vgl. P. Piper(Hg.): *Kudrun*, Anm. zu 1389, 4.

7 Ebenda.

つまり、一行目の *swer* 文は本来二行目後半の *daz* 文に属する関係文であるが、*daz* 文の枠を越えて文頭に移動した構文になっている。*daz* 文中の動詞 *wern* は人の 4 格と物の 2 格を取って、「ある人<sup>4</sup>にある物<sup>2</sup>を与える」の意で用いられるのが一般的であるが、K. バールチュや P. ピーパーの注釈では<sup>8</sup>、一行目後半の *gâbe* は *ihtes* に従属する部分の 2 格とされているため、二行目の *ir* は *gâbe* を指すのではなく、*swer* 文を受ける複数 2 格の人称代名詞である。ピーパーも *einen wern* を „*einem gewähren*“ の意であると見ているように、ここは物の 2 格が省略された構文であるとするのが適切であろう。

次に *swaz* についても同じように見てみよう。*swaz* 文が前置される例は『クードルーン』に 53 度見られ、そのうち指示代名詞によって受け直されるのが 43 度と多い。次はその一例である。

- (6) *die dâ wâren kristen, swaz man der dâ vant,*  
*die hiez der helt von Stürmen zuo einander bringen. (908, 2f.)*  
 そこにいたすすべてのキリスト教徒を  
 このシュトゥルメンの勇士は一ヶ所に集めさせた。

一行目前行は先行詞を含んだ関係文が前置されたもので、後行の指示代名詞 *der* によって受け直される。*der* は *swaz* にかかる複数の部分の 2 格で、さらに *swaz* が二行目冒頭にある複数の指示代名詞 *die* によって受け直される。このように中性の不定関係代名詞 *swaz* 中に複数の部分の 2 格がある場合、Mhd. では *swaz* で表わされるものを受ける代名詞は複数になることが多い。『クードルーン』でも例(6)を含め、前置された *swaz* 文を指示代名詞によって受け直す 43 例中 10 度<sup>9</sup>はこのような部分の

8 Vgl. Ebenda, Anm. zu 325, 3; K. Bartsch(Hg.): *Kudrun*, Anm. zu 325, 3.

9 例(6)の他に、201, 1. 674, 2. 693, 4. 795, 1. 1102, 3. 1148, 2. 1185, 4. 1329, 1. 1389, 4. *swaz* 文中に部分の 2 格を含まず、単数の指示代名詞が主文中に置かれる箇所は次の 33 箇所である：15, 1. 48, 2. 49, 2. 122, 1. 194, 2. 240, 1. 390, 1. 400, 1. 672, 3. 680, 2. 721, 2. 779, 2. 798, 4. 808, 2. 825, 2. 883, 1. 896, 1. 973, 2. 997, 2. 1010, 2. 1028, 2. 1036, 2. 1053, 1. 1072, 4. 1094, 4. 1111, 2. 1179, 3. 1406, 3. 1512, 4. 1578, 1. 1585, 4. 1633, 2. 1671, 2.

2格を伴う。例(4)の3行目後行のdenもここに含められるだろう。

『クードルーン』ではswer文、swaz文でそれらが主語の場合は関係文中の動詞はすべて単数で現れるが、『パルツイヴァール』には次のように複数の部分の2格に影響されて動詞までも複数になる例が見られる。

- (7) „swaz hie werder liute sint,  
die bringe ich,“ sprach der Bertenoys. (Parz. 761, 18f.)  
 「ここにいる高貴な人々を  
 皆連れて参ろう」とベルターネの人は言った。

Mhd.の文法書によれば、個々の文や各コンテクスト内で互いに関連付けられた語の間に存在する性、数、格の一致に関しては、Mhd.においてもおおむねNhd.と同様の規則が通用するが、性と数の場合にはNhd.よりもはるかに文法的な語形ではなくその内容が重視されるため、しばしばこの規則が破られる。集合的な単数の場合には複数の置かれることが稀でない<sup>10</sup>。不定関係代名詞構文に関しても、swer, swazが形式上は単数でありながら、「一般化」という意味内容自体に集合的な複数概念を含み得る可能性が元来からあったとすることができよう。

前置されたswaz文を人称代名詞で受け直す例は『クードルーン』に5例<sup>11</sup>見られるが、いずれも単数の代名詞である。また、主文中に代名詞の置かれないケースは3例<sup>12</sup>、さらにumbeやanなどと結びついた指示的な副詞dâ, darがswaz文を受け直すケースも2例<sup>13</sup>見られる。次に1例ずつ示してみよう。

- (8) die wol gelobeten frouwen sâzen alsô nâhen,  
swes die helde phlâgen, daz si ez bescheidenlîchen sâhen.

10 Vgl. Paul/Mitzka, § 228; § 230.

11 例(8)の他に275, 2. 316, 4. 843, 2. 1330, 3であり、いずれも部分の2格を伴わない。

12 例(9)の他に1002, 1. 1550, 4.

13 例(10)の他に699, 2.

誉れ高き婦人たちは勇士たちが行っていることを、 (43, 3f.)  
はっきりと見ることができるほど近くに座っていた。

- (9) *hân ich fride die zîte, swes ir welt, sô müget ir mich wol frâgen.*  
私が和睦の時を持てば、あなたが尋ねたいことは (652, 4)  
何でも私に尋ねることができます。

- (10) *diu küniginne bat,*  
*swaz in geschehen wære, die triuwe haben wolten,*  
*daz si die küniginne doch dar umbe niht mîden solten.*  
ヒルデ王妃は懇願した、 (937, 2 b-4)  
自分に対する忠誠を守ろうとした人々に何が起こったにしても、  
そのために彼らが自分を避けることのないようにと。

例(8)では一行目後行の *alsô* と二行目後行の *daz* が相関的に „so..., dass.“ の意で用いられ、二行目前半の *swes* 文を *daz* 文中の *ez* で受け直し、先ほどの例(5)と同様に副文中の関係文が前置された形になっている。例(9)では、定動詞を文頭に置き、直接疑問文の語順で用いられた条件文が前半に置かれ、さらに *swes* 文を挟んで *sô* 以下に主文が続く。*swes* は *swaz* の2格形であり、*frâgen* の目的語となる2格形 *des* を主文に補って考える。例(10)では、一行目の *bat* の目的語は三行目の *daz* 文であり、二行目前半の *swaz* 文が三行目の *dar umbe* の *dar* で受け直される。ここも例(5)や(8)のように *swaz* 文、およびそれに続く後半の関係文が *daz* 文の前に置かれた構文になっている。

## 1.2. 関係文の後置

関係文が前置される場合には、これまで見てきたように *swer* 文や *swaz* 文を主文中の指示代名詞で受け直す構文が『クードルーン』でも最も一般的であったが、関係文が後置される場合には、先行する主文中に關係文を先取りする代名詞が置かれることは少ない。*swer* 文に関して言えば、後置されるケースは『クードルーン』に6例と少なく、主文中の代名詞に関連付けられるのは例(11)のわずか一箇所のみであり、残りの

5例<sup>14</sup>はすべて代名詞のない構文である。また、swaz文に関しても33例中28例が代名詞なしである。でははじめに、関係文の前置と同様にswaz文から見ていくことにしよう。

- (11) *der künic gab in allen, swer an in ihtes gerte;* (309, 3)

王は自分に何かを求めた者には皆に与えた。

- (12) *Wir gebenz swer es ruochet, sît wir von hinnen varn.* (436, 1)

私たちはここから出発するので、

それ（食料）を必要とする者には誰にでも与えます。

最初の例は複数3格の人称代名詞in、およびそれと同格的に置かれたallenがswaz文を先取りするケース<sup>15</sup>であり、先ほどから問題となっている数の不一致を示す箇所である。二つ目の例はswaz文を先取りする代名詞のない例である。前半のgebenezはアクセントのないezが前接(Enklise)によって動詞gebenと融合した形で、ezは前節のspise「食料」を指す。gebenの3格目的語はswazから補い、Nhd.ならdem, werとなるべきところである。

次に示す例はswaz文が主文に対して後置され、全体として名詞節の機能を果たす点ではこれまで見てきたケースと同様であるが、swaz文全体が何らかの人を表わす表現ではなく、事柄を表わすと感じられる非常にまれな、興味深い箇所である。

- (13) *Ez was ein sælic stunde, daz sîn ie wart gedâht,  
swer dir daz râten kunde, daz wir dir haben brâht  
die schœnesten frouwen, daz ist âne lougen,*

*geloube mir der mære, die ich ie gesach mit mînen ougen.*“ (477)

これはまことのことである、私が今まで自分の目で見してきた最も美しい女性を、これを信じて頂きたいのだが、

あなたのもとへお連れしようと考え、ある者がそうするよう

14 例(12)、(13)の他に20, 3. 350, 2. 1046, 1.

15 Vgl. P. Piper: *Kudrun*, Anm. zu 309, 3.



あなたに勧めることができたのはまことに幸せなひと時でした。

ピーパーはこの節について非常に詳しい注釈を付けている。一行目の *ein sælic stunde, daz...* は „*ein Augenblick des Glückes, wo...*“ の意であり、後行の *sîn* は *denken* (*wart gedâht* で受動になっている) の 2 格目的語で、注釈では二行目前半の内容を指しているとあるが、ここは二行目後半の *daz* 文を指していると見た方が良からう。そして二行目前半の *swer* 文は、 „*dass einer dir den Rat zu erteilen vermochte*“ という訳が添えられているように、*daz* 文に相当するものと解釈されている。*swer* 文中の *daz* は二行目後半から三行目前半までの *daz* 文を先取りする指示代名詞で、三行目後半と四行目前半の二つの挿入文を挟んで、さらに *daz* 文中の *die schoenesten frouwen* を先行詞とする関係文が後半に続く、という複雑な構文である。一行目から二行目前半までを彼は、*daz sîn wart gedâht daz man dir daz râten kunde* と *ez was ein sælic man swer dir daz râten kunde* という二つの構文の混交 (Konstruktionsmischung) と見ているが、Mhd. では主語文や目的語文、結果文の導入詞としての *daz* の代わりに定関係代名詞 *der* (= *daz er*) がしばしば用いられる<sup>16</sup> ことから、依然として推測の域は出ないものの、こういった構文に対する一つのヴァリエーションとして、ここでは不定の意を持つ *swer* が *daz einer* の代わりに用いられたのではないかと考えたい。またここでは一詩節中に 4 度も *daz* が登場するため、*daz* の重複を避けようという意図も働いたのではないだろうか。いずれにせよ、『クードルーン』でこのような構文が見られるのはこの一箇所のみであり、極めて例外的なものである。

16 Vgl. Paul/Mitzka, § 347, 1 u. 3; BMZ, I, S. 320b, 4ff. 例えば次の例のように、二行目冒頭の関係代名詞 *der* は本来一行目の *sô* と相関的に *daz er* („*so...*, *dass er*“ の意) となるべきところである。

*niemen ist sô rîche,  
der gein dir koste mege hân,  
hâstu vrâge ir reht getân.“* (Parz. 254, 28-30.)  
あなたが正しく尋ねたのならば、  
あなたと豪華を競うことができるほど  
裕福な人は誰もおりません。

では本題に戻って、後置されたswazについて見てみよう。既に上で述べた通りswazに関しても関係文を先取りする代名詞が主文中に現れる例は少なく、指示代名詞が1例のみ、人称代名詞が4例<sup>17</sup>である。これに対して代名詞が欠落したケースは28例<sup>18</sup>と数多く見られる。まずは1箇所のみ見られた指示代名詞の例から見てみよう。

- (14) *der swachesten dar under, swaz ir diu gebôt,  
 daz muose si leisten, swaz si diu wûrken hieze.* (1010, 2f.)  
 その内の最も身分の低い者が彼女に命じたことですら、  
 彼女は言いつけられたことは何でもしなければならなかった。

ここはオルマニーエ（ノルマンディー）の王妃であり、wûlpinne（狼女）と呼ばれるほど意地の悪いゲールリントから数々の嫌がらせを受け、クードルーンとともにその苦難に耐えるヒルデブルクについて述べられた箇所で、一行目前半のdarはそのゲールリントに仕える侍女たちのことを指している。P. ピーパーの版では一行目前半のder swachestenがdiu swachesteと女性単数1格になっており、これを後半の指示代名詞diuで受け直すという構文になっている。従ってK. バールチュの版のder swachestenは注釈に„*der niedrigsten*“の意とあるが<sup>19</sup>、これは女性単数2格で性質を表わすものと捉えられているのであろう<sup>20</sup>。どちらの解釈にせよ一行目前半のder(あるいはdiu) swachestenが後行および2行目後行のdiuによって受け直され、一行目で述べられたswaz文の内容が二行目の指示代名詞dazによって受け直されると同時にこのdazは二行目後半のswaz文を先取りする指示代名詞でもある。

17 例(15)の他に858, 2. 1352, 1. 1363, 1.

18 例(16)の他に97, 4. 159, 2. 163, 2. 217, 3. 280, 3. 291, 2. 3. 443, 1. 469, 1. 3. 586, 4. 691, 4. 770, 3. 790, 3. 878, 3. 975, 4. 1035, 2. 1045, 3. 1190, 1. 1223, 3. 1225, 3. 1296, 4. 1427, 1. 1540, 4. 1541, 2. 1636, 4. 1679, 3.

19 Vgl. K. Bartsch, *Kudrun*, Anm. zu 1010, 2.

20 性質を表わす2格とは例えば次のようなケースである。

*ez ist sô hôher mâge der marcgrâvinne lîp,* (Nib. 1678, 2.)  
 辺境伯の姫君は非常に高貴な一門の出である。

次に人称代名詞で先取する例、代名詞なしの例を順に挙げよう。

- (15) wir müezens alles erbîten, swaz uns nu mac geschehen.“ (1363, 2)  
「私たちの身に何が起ころうとも、すべて待たねばならぬ。」
- (16) nu frâget swes ir wellet. (1223, 3 a)  
さあ、聞きたいことを聞きなさい。

例(15)は前半の *müezen* に前接された中性単数 2 格の人称代名詞 *es* が後半の *swaz* 文を先取りしており、*alles* は *es* と同格である。例(11)の *swer* に対応する箇所であるが、ここでは数の不一致はない。P. ピーパーの版では *alles* が複数の *alle* と取り替えられている<sup>21</sup>。こうなると *alle* は文頭の主語 *wir* と同格的に置かれたものということになり、二つの版で解釈に違いがある。例(16)では、K. バールチュが *swes* は *frâgen* に従属する 2 格形であり、関係代名詞を主文で必要とされる指示代名詞の 2 格に関係づける場合、関係代名詞が 2 格となり指示代名詞は欠けることがあるという注釈を付けている。つまり彼は *wellen* の 4 格目的語 *swaz* を想定し、これが *frâgen* の要求する 2 格形へと牽引 (Attraktion) されたと見ているのであろうが、ここは助動詞 *wellen* に補われるべき *frâgen* が省略された形と見て、主文と関係文で要求される格はともに 2 格であるとする方が適当であろう。明らかに牽引のケースであると判断できる箇所は辞書によれば次のような箇所である<sup>22</sup>。

- (17) dâ wart der fürste schiere  
bedwungen swes man an in warp. (Parz. 265, 30f.)  
そこで大公は自分に求められたことを  
何でもすぐに受け入れるしかなかった。

主文の動詞 *bedwingen* (*wart...bedwungen* で受動文になっている) が人の 4 格と物の 2 格をとって „jn. zu et.<sup>3</sup> zwingen“ の意で用いられるのに対し

---

21 Vgl. P. Piper: *Kudrun*, 1363, 2.

22 Vgl. BMZ. III, S. 571b, 12ff.

て、関係文中の動詞 *warp* (*werben* の直説法過去) は物の 4 格と前置詞 *an* + 人の 4 格をとって „*jn. um et.<sup>4</sup> bitten, et.<sup>4</sup> von jm. verlangen*“ の意である。従って *swes* という 2 格形は関係文中の動詞 *werben* が要求する格ではなく、主文中の動詞 *bedwingen* が要求する 2 格に牽引されている。『イーヴァイン』でもこういった牽引の箇所が 2 例<sup>23</sup>とまれではあるが見られる。

(18) *und sult im des genâde sagen*

*swes ich iu hie gedienet hân: (Iw. 5120f.)*

ここで私があなたがたに奉仕したことに対しては  
彼に礼をおっしゃってください。

一行目が *einem eines d. genâde sagen* で „*jm. für et. danken*“ の意であるのに対して、二行目の *dienen* は人の 3 格と事の 4 格をとって „*einem etwas leisten*“, „*einem in etwas dienen*“ の意である。つまり本来 4 格であるべき *swaz* が一行目の *des* に引かれて 2 格の *swes* へと牽引されている。『クードルーン』では明らかに牽引のケースであると判断できる箇所は皆無であり、関係代名詞とそれを受ける代名詞の格はそれぞれ関係文と主文の要求する格に合わせられている。

これまで見てきた例はすべて、関係代名詞が主文中に置かれた、あるいは置かれるべき代名詞に関連付けられていたが、次に示す例は後置された *swaz* 文が主文中の名詞に関連付けられる、つまり、定関係代名詞 *der* を用いた構文と同様であると感じられる非常にまれなケースである。

(19) *Die helde von den Stürmen und von Tenelant,*

*die brâchen guote bürge, swaz man der dâ vant. (1546, 1f.)*

シュトゥルメンとデンマークの勇士たち、  
彼らはおよそそこにあったどんな立派な城でも破壊した。

(20) *Er wuohs in einer wüeste, der edele fürste junc,*

*bî den wilden tieren, des mohte im einen sprunc*

23 例(18)の他に Iw. 5733.

lebendes niht enphliehen, swaz er wolte vâhen. (167, 1-3)

この気高く若い王子は、荒野で野生の獣たちのもとで育った。  
それゆえ彼が捕らえようとしたどんな生き物も  
彼からひと跳びも逃れることはできなかった。

例(19)では、一行目に挙げられた勇士たちが二行目冒頭の指示代名詞 *die* で受け直され、主文の主語となっている。後半の *swaz* 文は本来認容文の導入詞として「立派な城を、そこにあったどんな城であれ、破壊した」というように *guote bürge* を同格的に説明するものであったと考えられる。P. ピーパーの注釈でも „*soviel sich derer dort befanden*“ という限定の意の接続詞を用いた部分訳が添えられているが<sup>24</sup>、ここは „*alle Burgen, die...*“ のように定関係代名詞による表現と同じ内容を持っていたと見た方が適切であるように思われる。例(20)も同様に形式上は認容文であるが、意味するところは „*Tiere, die er an Schnelligkeit übertraf*“ であるとの注釈を K. バールチュは付けている<sup>25</sup>。 *swaz* 文が一部には定関係代名詞と全く同じ意味、用法で用いられていたのではないかということを示す箇所として、内容面でも詩型の面でも『クードルーン』に大きな影響を与えたと言われる『ニーベルンゲンの歌』から幾つか例を挙げることにしよう。

(21) Prünhilt unt Uote und swaz man dâ vrouwen vant,

die enbuten alle ir dienest in Sîfrides land

den minneclîchen vrouwen unt manigem kûenem man.

(Nib. 737, 1-3 B)

プリュンヒルトやウオテ、そしてそこにいたご婦人方は皆  
かの愛らしいご婦人方と多くの勇敢なる武人らに向けて  
ジーフリトの国へ挨拶を伝えるようことづけた。

(22) wunne âne mâze, mit vreuden überkraft

heten al die liute, swaz man ir dâ vant. (Nib. 270, 2f.)

24 Vgl. P. Piper: *Kudrun*, Anm. zu 1546, 2.

25 Vgl. K. Bartsch: *Kudrun*, Anm. zu 167, 3.

そこにいたすべての人々は  
限りない悦楽と満ち溢れる喜びを抱いた。

例(21)は Prünhilt と Uote、および一行目後行の swaz 文で言い表された人を二行目冒頭にある複数の指示代名詞 *die* で受け直すケースであり、これまでも見てきた数の不一致を示す構文であるが、A 写本では一行目が *Frou Uote und al die frouwen, die man ze hove vant*, と定関係代名詞による表現になっている。つまり swaz + 部分の複数 2 格による表現は、部分の複数 2 格を意味上の先行詞とする定関係代名詞構文と同じ内容を持っていたと見ることができる。さらに例(22)の二行目は上の A 写本とほぼ同様の構文であるにもかかわらず、定関係代名詞でなく swaz が用いられている。不定、一般化の関係代名詞が定関係代名詞と同様の機能で用いられるこのような例は、当時両者の境界が時としてあいまいになり、両構文が混交していたことを示している。本稿では従って、例(19)や(20)のケースを次章で扱う副詞的機能の関係文における認容文としてではなく、主文中の名詞成分に対する付加語の機能を果たす付加語文として定関係代名詞文に分類する。

## 2. 副詞的機能の関係文

これまで見てきた名詞的用法の関係文は *swer*, swaz 文全体が主文中の主語や目的語となる、つまり、関係文全体が上位文に対する義務的な補足成分 (*Ergänzung*) として機能するものであった (また一部には、定関係代名詞と同様の機能を持つ場合もあったが)。次に *swer*, swaz 文全体が上位文に対する副詞規定語、つまり任意の添加語 (*Angabe*) として機能するケースを見てみよう。

### 2.1. 副詞的機能の *swer*

*swer* 文全体が上位文に対する任意の添加語として機能する場合、*swer* は条件文や認容文の導入詞として、*„wenn einer“* 「もし誰かが~すれば」あるいは *„wer auch immer“* 「誰が~するのであれ」の意味で用いられるが、

『クードルーン』に9例<sup>26</sup>見られる副詞的用法の *swer* 文は、すべて前者の意味で用いられる。以下にいくつか例を挙げてみよう。

- (23) *swer den gerne sæhe,*  
*der ist hie sô nâhen, daz daz in kurzer zîte wol geschæhe.*“  
彼（ハゲネ王）に会いたいと思う者がいるなら、 (145, 3bf.)  
彼はこの近くにいるので、すぐにそれが叶うでしょう。
- (24) *mir ist leit unmâzen, swer iu iht leides tuot,*  
*dâ mite er iu beswæret daz herze und ouch die sinne.* (1049, 2f.)  
もし誰かが、あなたの心も魂も悩ます何らかの苦しみを  
あなたに与えるなら、私にとっても甚だ辛い事なのです。

例(23)では、条件の意味の *swer* 文が前置され、二行目前半に主文が続く。K. バールチュヤや P. ピーパーの注釈でも *swer* は „*wenn jemand*“ の意であるとされている<sup>27</sup>。二行目冒頭の *der* は *swer* を受け直す指示代名詞ではなく、*swer* 文中にある4格の指示代名詞 *den*（ハゲネ王）を指している。形式上は二行目前半が一行目の *swer* 文に対する帰結部となるはずであるが、P. ピーパーの解釈によれば一行目以降は „*so kann er es, denn er (der) ist ganz in der Nähe*“ と訳されており、一行目と二行目の間に置かれた省略部分に意味上の帰結部が置かれている。しかし、二行目後半冒頭の *daz* は *sô* と相関的に用いられ、結果を表わす従属接続詞であるので、実質的帰結部が *daz* 文に移動したと解釈した方が良さそうである。つまり一行目の *swer* 文は本来 *daz* 文中にあるべき第二級の副文であり、これが *daz* 文の枠を越えて文頭に置かれた構文と見た方が適切であろう。例(24)では条件文としての *swer* 文が主文に対して後置され、*leides* を指す二行目の *dâ* は *mite* とともに関係副詞文を導入する。Nhd. であれば „*womit*“ で表わされるところである<sup>28</sup>。Mhd. では関係副詞として最も一般的に用い

26 例(23)の他に前置:213, 2. 1309, 4. 後置は(24)の他に1294, 2. 1485, 3. 1567, 2. 1582, 4.

27 Vgl. K. Bartsch: *Kudrun*, Anm. zu 145, 3; P. Piper, ebenda.

28 Vgl. P. Piper: *Kudrun*, Anm. zu 1041, 3. 1029~1049節はバールチュヤとピーパーの版で節の順序がかなり異なっている。

られるのは *dâ* であり、*wâ* (> *nhd. wo*) はもっぱら疑問詞として用いられる。*Nhd.* における関係副詞としての *wo* の用法は *Mhd.* の不定、一般化の関係副詞 *swâ* 「～するところ (時) はどこ (いつ) でも」から発達したものであり<sup>29</sup>、*Mhd.* 期には依然として *swâ* と *wâ* の間に厳密な区別がなされていた。

(23)、(24) のように条件文が期待される箇所では関係文が用いられるのは、*Mhd.* の文法書に構文の混交の一例として紹介されており、そこでは不定、一般化の関係代名詞だけではなく、定関係代名詞 *der* を用いた例も挙げられている<sup>30</sup>。

## 2.2. 副詞的機能の *swaz*

副詞的機能の *swaz* は二つに分類することができる。一つは認容文の導入詞として „*was auch immer*“ 「たとえ何が～であれ」の意味で用いられる場合であり、もう一つは *swaz* 自体が副詞的な 4 格として、 „*so sehr als, wie sehr auch*“ 「～ほど～」 「どれほど～であれ」の意味で用いられるケースである。両者とも関係文全体が上位文に対する任意の添加成分となる点は共通しているが、前者は関係文中における *swaz* の機能が名

29 Vgl. Behaghel, *Deutsche Syntax* III, S. 732f. § 1382.

30 Vgl. Paul/Mitzka, § 347, 2. 『クードルーン』にも条件文の導入詞として用いられた *der* が見られる。

Der nu welle dienen an mir michel guot,  
 diu mære, diu ich enbiute, swer daz gerne tuot,  
der diu sage dem künige, dem gibe ich golt daz rîche. (141, 1-3)

もし誰かが今私から多くの褒美を得るつもりであり、  
 私が伝える話を使者となって王 (ハゲネ) に知らせてくれるなら、  
 それを喜んで行う者に私は十分な黄金を与えよう。

一行目の *der* は条件文の導入詞であり *an mir dienen* は物の 4 格とともに „*von mir etwas verdienen*“ の意である (Vgl. BMZ I, S. 369b, 9ff.)。三行目の *diu* は二行目前半の *diu mære* を指し、三行目冒頭の *der* は一行目と同じく条件文の導入詞である。P. ピーパーの版では *dêr* (= *daz er*) となっているが、K. バールチュはこのような書き換えが必ずしも必要でないと注釈で述べている (Vgl. Bartsch, Anm. zu 141, 3.)。二行目後半の *swer* 文はふつうの不定関係代名詞文で、三行目後半の指示代名詞 *dem* によって受け直されている。



詞的な成分となるのに対し、後者は関係文中でも副詞的な成分となる点に違いがある。『クードルーン』に見られる副詞的機能のswazについては、前者が13例<sup>31</sup>、後者が11例<sup>32</sup>である。次にそのうちのいくつかを挙げてみよう。

- (25) *ir was leit umb ir friunde, swes halt ir Hetele mohte getrouwen.*  
 ヘテレが彼女のことをどう思おうと、 (Kudr. 537, 4)  
 彼女には身内の者たちのことで胸が痛んだ。
- (26) *Dô ir daz was erlobet, daz si daz gewant,  
 diu freuden was beroubet, mit ir ûf den sant  
 ze waschen tragen müese in ir grôzen leide,  
 swaz ander iemen tæte, noch muosten mêre waschen dise beide.*  
 喜びを奪われた彼女（クードルーン）が衣装を (Kudr.1068, 1-4)  
 彼女（ヒルデブルク）と一緒に浜で洗濯するために  
 運ぶことが許された時、他の誰がどれほど多く洗濯したにせよ、  
 この二人はそれ以上に洗濯をしなければならなかった。

例(25)は認容文の導入詞として用いられたswazの例である。一行目後半のswesはswazの2格形で、getrouwenの目的語となっており、*eines d. einem getrouwen*で、*„jm. et.<sup>4</sup> zutrauen“*の意である。またhaltは認容の意味を強調する副詞（*„auch“*の意）で<sup>33</sup>、K. バールチュヤやP. ピーパーもそれぞれ*„was auch Hetel ihr zutrauen mochte“*、*„was auch Hetel von ihr denken mochte“*と認容文で訳している<sup>34</sup>。例(26)では、dôによって導入された時を表わす副文が一行目前行に置かれ、一つ目のdazは一行目後行から三行目最後まで続くdaz文を指す指示代名詞である。そしてdaz文

31 例(25)の他に、関係文の前置: 279, 1. 365, 4. 367, 3. 553, 2. 619, 1. 983, 2. 985, 2. 1272, 1. 1481, 4. 後置: 940, 4. 982, 2. 1463, 2.

32 例(26)の他に、関係文の前置: 326, 1. 388, 1. 448, 1. 1509, 2. 1581, 4. 後置: 598, 1. 1091, 4. 1347, 3. 1563, 1. 1656, 1.

33 Vgl. BMZ, I, S. 618b, 50ff.

34 Vgl. K. Bartsch, Anm. zu 537, 4; P. Piper, ebenda.

中にはさらに二行目前行の関係文が挿入され、一行目後行の *si*、あるいはさらに前の *ir* にかかる。四行目の *swaz* は「他の者が何をしようが」といった名詞的な用法ではなく、P. ピーパーの注釈に „*soviel ein anderer fertig brachte*“ とあるように副詞的 4 格の *swaz* と見るべきである。ここは、ゲールリントから毎日山のような衣服を渡され、朝から晩までクードルーンとヒルデブルクが洗濯をさせられるというくだりであり、「洗っても洗っても洗いきれないほどたくさんの洗濯物であった」という量の多さを問題にしている。四行目後行の *noch...mêre* は *waschen* の目的語として洗濯物を指しているのではなく、K. バールチュの注によれば „*auch ferner noch*“ の意であり<sup>35</sup>、BMZ でもこの箇所は *waschen* が目的語をとらない項目に分類されている<sup>36</sup>。

### 3. おわりに

これまで見てきた不定、一般化の関係代名詞 *swer*, *swaz* について、第一章で扱った名詞的機能の関係文を表 1 に、第二章で扱った副詞的機能については表 2 に、『イーヴァイン』と比較したものを一覧表にして示そう。表中に *nom-dat: 4 (1)* とあれば、関係文が前置される場合、関係代名詞の格が 1 格、それを受け直す主文中の代名詞の格が 3 格であり、関係文の後置であれば反対に、主文の代名詞が 1 格、関係代名詞が 3 格であることを示している。括弧内の数字は 4 例中 1 例で主文中の代名詞が複数であるという意味である。また括弧付きの格表示（例えば (akk)）は実際にはテキストに現れていないが、主文や関係文中で要求される格が 4 格であるという意味である。

『クードルーン』では *swer* 文が前置される場合、主文中の指示代名詞によってこれを受け直す構文が最も一般的である。この点では基本的な用法が Nhd. の *wer* と同様であったことを示しているが、Mhd. では人称代名詞によって受け直すことも可能であった。また一部には、極めて例外的ではあるが所有代名詞や複数の代名詞による受け直しも行われた。

35 Vgl. K. Bartsch, Anm. zu 1068, 4.

36 Vgl. BMZ, III, S. 533a, 24.

表 1

		Iwein				Kudrun				
voran	swer	<i>der</i>	<i>er</i>	ohne Pron.		<i>der</i>	<i>er</i>	ohne Pron.	<i>sîn</i> (poss.)	
		nom-nom:10 nom-akk:5 nom-dat:5 nom-gen:2 dat-nom:1 akk-nom:1(1)	nom-nom:5 nom-gen:1 nom-dat:1			nom-nom:11 nom-dat:4(1) nom-akk:2 gen-nom:1 akk-dat:1 akk-akk:1	nom-dat:5(1) nom-gen:1(1) dat-dat:1		nom-gen:1	
		24(1)	7	0		20(1)	7(2)	0	1	
		31(1)				28(2)				
	swaz	<i>daz</i>	<i>ez</i>	ohne Pron.	<i>dâ</i>	<i>daz</i>	<i>ez</i>	ohne Pron.	<i>dar</i>	Subst.
		akk-gen:4 akk-akk:2 gen-gen:2 akk-nom:1 nom-nom:1 nom-akk:1	akk-nom:1		akk-dat:1 ( <i>dâ an</i> ) nom-dat:1 ( <i>dâ mite</i> )	akk-akk:14(5) akk-gen:11(2) akk-nom:9(1) nom-gen:3 gen-gen:3 nom-nom:1 nom-dat:1(1) nom-akk:1(1)	gen-akk:2 akk-akk:2 akk-gen:1	akk-(gen):2 gen-(gen):1	nom-akk:1 ( <i>dar umbe</i> ) gen-dat:1 ( <i>dar an</i> )	akk-nom:1(1) ( <i>hundert oder mêre</i> )
11		1	0	2	43(10)	5	3	2	1(1)	
	14				54(11)					
hinten	swer	<i>der</i>	<i>er</i>	ohne Pron.		<i>der</i>	<i>er</i>	ohne Pron.		<i>swer</i> ="dass einer" nom: 1
			nom-nom:1	(dat)-dat:2 (akk)-akk:1			dat-nom:1(1)	(dat)-dat:2 (dat)-nom:1 (akk)-nom:1		1
		0	1	3		0	1(1)	4		1
		4				6(1)				
	swaz	<i>daz</i>	<i>ez</i>	ohne Pron.		<i>daz</i>	<i>ez</i>	ohne Pron.		Subst.
		gen-gen(akk):1 (Attraktion)	akk-nom:1 nom-gen:1 nom-akk:2	(akk)-gen:6 (akk)-nom:3 (akk)-akk:10 (nom)-akk:2 (akk)-akk(gen):1 (Attraktion)		akk-akk:1	akk-akk:2 nom-gen:1 gen-nom:1	(akk)-akk:13 (gen)-gen:5 (akk)-gen:5 (nom)-akk:2 (gen)-nom:1 (gen)-akk:1 (akk)-nom:1		gen-akk:1 (lebendes) akk-akk:1(1) (die andern alle) dat-akk:2(2) ([allen iuwarn] recken) akk-akk:1(1) (guote bürge)
1		4	22		1	4	28		5(4)	
	27				38(4)					

表 2

	Iwein				Kudrun			
	swer		swaz		swer		swaz	
	voran	hinten	voran	hinten	voran	hinten	voran	hinten
konditional	nom:6 gen:1 dat:2	nom:4 dat:1	gen:1 akk:1	akk:1	nom:4	nom:4 akk:1		
konzessiv	akk:1		nom:1 akk:1	akk:2 nom:1			akk:11 nom:1	gen:2 akk:1 nom:1
adv. Akk.			2	3			3	5
	10	5	6	7	4	5	15	9

また中性のswazに関してもswerと同様に、前置された関係文はおおむね後続の指示代名詞によって受け直されるが、swazに特徴的であるのは複数の指示代名詞による受け直しの例が多いということである。大抵の場合このような数の不一致を示す箇所は、複数の部分の2格を伴うことによってswazが単数の語形であるにもかかわらず、内容的には複数であるという集合的な概念を表わすためと考えられる。先行するswaz文を受け直す代名詞としてその他に挙げられるのは、人称代名詞や指示的な副詞 *dâ*, *dar* もあり、さらには受け直す代名詞が置かれないこともある。また、代名詞でなく名詞を付加語的に説明する定関係代名詞構文との混交を示すケースも見られ、実に多様な構文が用いられている。一方『イーヴァイン』では、swer文、swaz文を受け直すものとして挙げられるのは『クードルーン』と同様に指示代名詞が最も一般的であり、続いて人称代名詞、swazにおける指示的な *dâ* であり、それぞれの出現頻度も『クードルーン』にほぼ対応している。しかし、構文のヴァリエーションはこの三種類に限られており、構文の多様性を示す『クードルーン』とは対照的に、swer、swaz文の基本的な形式が保たれていたとすることができる。この形式から唯一逸脱していると感じられるのはswer文を複数の指示代名詞 *diu* で受け直す1例のみである。

関係文が後置される場合には、前置とは反対にswer、swaz文とも主文中に関係文を先取りする代名詞の置かれないのが最も一般的である。『クードルーン』と『イーヴァイン』を比較しても、それぞれの用例数の出現頻度はほぼ対応している。ただし、『イーヴァイン』に見られた、

関係代名詞の格が関係文中で必要とされる格ではなく、主文中で要求される格に合わせられた牽引の現象は『クードルーン』には1例もなかった。数の不一致のケース、定関係代名詞構文との混交を示すケースがまれに見られることは『クードルーン』においても前置の場合と同様であるが、*swer*文が„*dass einer*“の意で*dass*文との混交、あるいは破格構文の一種と見られる箇所は非常に興味深い。

副詞的機能の関係文に関して言えば、*swer*, *swaz*が認容文を表わすことも多く、『イーヴァイン』では、*swaz*も認容文の導入詞としてだけでなく、ごく稀に条件文をも表わす例があったが、『クードルーン』にはこれは1例も見られなかった。*swer*が認容文を表わすか条件文を表わすかは、関係詞によって決定されるのではなく、副文で述べられた条件や前提に対して主文の帰結が順接的であれば条件文、逆説的であれば認容文といった具合に、主文と副文の陳述内容がどのような相互関係にあるかに依拠している。副詞的4格の*swaz*に関して認容の意味を持つ場合にはそれが名詞的な用法「何が～であれ」であるのか、副詞的な用法「どれほど～であれ」であるのか、両者の境界が明確でない場合も見られる。

このように『クードルーン』に見られる*swer*, *swaz*文は『イーヴァイン』と比較すると概して構文の多義性、多様性に特徴があると言える。構文の混交や数の不一致といった現象は、一方では*swer*, *swaz*文が文法的な整合性を欠き、文法化の進んでいない未発達の構文であるということを示しているかもしれないが、他方ではクードルーン詩人がこの叙事詩をより印象的に語るために、文体的な手段として意図的にこのような構文を用いたのではないかということも考えられる。また中世の叙事詩では、押韻技法を駆使し、文中での語のリズムを整えるため文構造に大きな制約が加えられるという特殊な事情があることも要因の一つとして考えなければならないだろう。本稿では押韻技法に関する考察を行うことは残念ながら不可能であったが、このような観点からの議論も今後の課題として扱いたい。

使用テキストおよび参照テキスト

- K. Bartsch: *Kudrun*. Neue ergänzte Ausgabe der fünften Auflage, überarbeitet und eingeleitet von K. Stackmann. Wiesbaden 1980.(=Kudr.)
- P. Piper: *Kudrun*. Stuttgart 1895 (Kürschners Deutsche National-Litteratur, 6. Band).
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff, Übersetzung und Anmerkungen von Thomas Cramer, Berlin 1968.(=Iw.)
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von H. de Boor; 22. revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage, Mannheim 1988.(=Nib.)
- Dasselbe. Nach der Handschrift C, herausgegeben von Ursula Hennig. Tübingen 1977.
- Dasselbe. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart 1997.
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Herausgegeben von Albert Leitzmann, 7. Auflage, revidiert von Wilhelm Deinert, Tübingen 1961-65(ATB 12, 13, 14).
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival* (Band I - II). Nach der Ausgabe Karl Lachmanns, revidiert und kommentiert von Eberhard Nellmann, übertragen von Dieter Kühn, Frankfurt am Main 1994 (Bibliothek des Mittelalters, Texte und Übersetzungen, herausgegeben von Walter Haug; Bd. 8/1-2)

主要参考文献

- Der Nibelunge Nôt. Mit den Abweichungen von der Nibelunge Liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuche. Herausgegeben von Karl Bartsch; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1880. Hildesheim 1966.
- G. F. Benecke, W. Müller, F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch I - III*; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66. Hildesheim 1963.(=BMZ)
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 18. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka. Tübingen 1960.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 24. Auflage, überarbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse. Tübingen 1998.
- Jacob Grimm: *Deutsche Grammatik*. Bd. IV. Herausgegeben von Gustav Roethe und Eduard Schröder, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1898, Hildesheim 1967.
- Otto Behaghel: *Deutsche Syntax*. Eine geschichtliche Darstellung. Bd. III. Heidelberg 1928.

## Zur Konstruktion der verallgemeinernden Relativsätze in der Kudrun

Kan NAGANAWA

Die verallgemeinernden Relativpronomen *swer* in der Bedeutung „jeder, wer“ und *swaz* in der Bedeutung „alles, was“ können das Bezugswort in sich vereinen und sowohl voran- als auch nachgestellt werden. Außerdem können sie durch ein Demonstrativpronomen im Hauptsatz vorweg- oder aufgenommen werden. Im Mittelhochdeutschen ist es aber auch möglich, die Relativsätze auf das Personalpronomen *er* oder *ez* zu beziehen. Die den Relativsatz aufnehmenden Pronomen kommen vereinzelt im Plural vor. Diese Erscheinung ist sicherlich auf die kollektive Bedeutung zurückzuführen, die *swer* und *swaz* von Haus aus gehabt hatten. In der Kudrun finden sich diese Belege der Inkongruenz des Numerus verhältnismäßig oft bei *swaz* mit einem pluralischen partitiven Genitiv. Hier sei je ein Beispiel von *swer* und *swaz* gezeigt.

(1) *der künic gab in allen, swer an in ihtes gerte; (Kudr. 309, 3)*

(2) *die dâ wâren kristen, swaz man der dâ vant,*

*die hiez der helt von Stürmen zuo einander bringen.*

(Kudr. 908, 2f.)

Bei Beispiel (1) wird der *swer*-Satz im Abvers durch das pluralische Personalpronomen *in + allen* vorweggenommen. Bei Beispiel (2) erfolgt die Wiederaufnahme des *swaz*-Satzes durch das ebenfalls pluralische Demonstrativum *die*. Der vom *swaz* abhängige partitive Genitiv *der* nimmt den vorangestellten Relativsatz des ersten Anverses auf.

In der Kudrun finden sich andere bemerkenswerte Belege, in denen sich der nachgestellte *swaz*-Satz auf ein substantivisches Satzglied im vorangehenden Hauptsatz, und zwar im Plural bezieht. In diesem Fall ist

die Funktion des Relativums gleich wie die des bestimmten Relativums.

- (3) *Die helde von den Stürmen und von Tenelant,*  
 die brâchen guote bürge, swaz man der dâ vant. (1546, 1f.)

Hier könnte man den *swaz*-Satz als eine appositionelle Angabe für *guote bürge* auslegen. Aber es gab damals irgendeine Berührung zwischen den beiden Relativkonstruktionen, also eine Konstruktionsmischung. Das kann man mit den folgenden zwei Belegen im Nibelungenlied bestätigen.

- (4) *Prünhilt unt Uote und swaz man dâ vrouwen vant,*  
die enbuten alle ir dienest in Sîfrides land  
 den minneclîchen vrouwen unt manigem kûenem man.  
 (Nib. B 737, 1-3)

- (5) *wunne âne mâze, mit vreuden überkraft*  
 heten al die liute, swaz man ir dâ vant. (Nib. 270, 2f.)

Die erste Zeile des Beispiels (4) ist in der Handschrift A durch einen bestimmten Relativsatz ersetzt: *Frou Uote und al die frouwen, die man ze hove vant*. Dieser Beleg zeigt fast die gleiche Konstruktion wie in der zweiten Zeile des Beispiels (5). Aus diesen Beispielen kann man schlussfolgern, dass der verallgemeinernde Relativsatz im Mittelhochdeutschen zum Teil auch als ein Attribut zum Substantiv oder zur Nominalphrase im Hauptsatz verwendet werden konnte.

Der von *swer* oder *swaz* eingeleitete Relativsatz kann auch als ein adverbiales Satzglied für den Hauptsatz fungieren und einen Konzessivsatz darstellen. Außerdem bildet der *swer*-Satz manchmal einen Konditionalsatz. Was *swaz* betrifft, habe ich im Iwein, wenn auch selten, Belege des Konditionalsatzes gefunden, aber in der Kudrun findet sich kein solcher Beleg. Dieses Werk zeigt allerdings hinsichtlich der Inkongruenz des Numerus oder der Konstruktionsmischung Vielfältigkeit.



『クードルーン』に見られる不定関係代名詞構文

Hier werden solche, vom Neuhochdeutschen gesehen, inkorrekten Konstruktionen bewusst als stilistische Mittel gebraucht.